

第9回基礎学習理論研究会 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2020年1月30日(木) 19時～22時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 河野(附属中)、石田(左京小)、島(郡山西小)、中澤哲(平群北小)
新宮(平城小)、中澤敦(きんき環境館)、中澤静(奈良教育大学)
- ◇内容 『思考と言語』ヴィゴツキー 第4章「思考とことばの発生的根源」
- 思考とことばは発生的に全く異なる根源を持つ
 - そのため、ことばがなくてもある程普遍的な操作は可能(チンパンジーより)
 - ・「表象」=観念化
 - ・ことばの根源:情動的表現反応であるだけでなく、自分と同類のものとの心理的接触の手段
- 子どもの思考の特徴
 - ・子どもの思考には前言語的段階も存在する。思考とことばの発達は、異なる線に沿って進み、互いに無関係である。しかし、ほぼ2歳ごろに、別々に進んできた思考とことばの発達路線が交叉し、一致するようになり、人間に固有のまったく新しい行動形式に変化する。
 - ①自分の語彙、自分の言葉の貯えを、新しいものの名前を問いただしながら、積極的に拡大し始める
 - ②言葉の貯えのきわめて急速に飛躍的増大
 - それによって、思考は言語的となり、ことばが知能的になる。→ ことばが思考のツールとなる
- 思考の発達における内言の過程の意義
 - ・外言と内言の中間の連結環は「ささやき」ではなく、ピアジェの言う自己中心的事物語である。
 - ・自己中心的事物語は真の意味の思考となる機能を果たしている
 - ・ことばは生理学的に内的なものとなる前に心理学的に内的なものとなる(生理学的にはまだ外言)
 - ・外言 → 自己中心的事物語 → 内言
 - ①原始的・自然的段階 前知能的事物語と前言語的思考の段階
 - ②素朴な心理学の段階 子どもの素朴な経験の段階
 - 言葉の発達の分野では、文法の構造や形式の習得が、論理構造やその形式に対応する操作の習得に先行する(つまり、まねるといふことか)
 - ③外的記号・外的操作の段階 自己中心的事物語の段階
 - ④転回段階 外的操作が内部へ引っ込み内的操作となる 論理的記憶の段階
 - 外的操作と内的操作の間にたえず相互作用がある
 - ・思考には言語的思考以外の領域がある。
 - 道具的・技術的思考、感情表現的機能の事物語、叙情的色彩の事物語
 - ・大人においても、思考と言語との融合は、言語的思考の領域に関してのみ意義を持つ
 - 他の非言語的思考および非知能的事物語の領域もあり、思考とは無関係である。
 - ・内言は、長い帰納的・構造的変化の集積を通じて発達する。それは、ことばの社会的機能と自己中心的機能との分化と一緒に、子どもの外言から分岐して生まれる。そして最後に、子どもによって習得される言語構造は、子どもの思考の基本的構造となる。
 - ・子どもの思考は、思考の社会的手段の習得にともなって、すなわち事物語に依存しながら発達する。
 - ・発達のタイプそのものが生物学的なものから社会的・歴史的なものに変化する。